水素分子の 解離性再結合断面積

北里大一般教育 高木秀一



Detached plasma

→ ガスダイバータ detached plasma

Molecular Assisted Recombination, Dissociation,

Ionization.

effect of high rotational states,

excited atom production

水素分子イオンの関与する過程

$$H_2^+(i = 1s\sigma_g, v, N) + e \rightarrow H_2^+(i, v', N') + e 振動回転遷移
 H_2^+(i', v', N') + e 電子励起
 H(i') + H(i'') 解離性再結合
 H(i') + H^+(i'') + e 解離性励起
 H^+ + H^-(i') イオン対生成
 H^+ + H^+ + 2e 解離性イオン化
 H_2 + h\nu 放射再結合
 X$$



2008年度: H₂+

2009年度: HD+ 信頼性の高いチェック D₂⁺ T₂⁺ ITER DT⁺

解離性再結合,解離性励起 振動回転遷移は信頼性が低いので除外



電子状態 (Sharp)



電子状態 (Sharp)



- ▲ 初期振動状態依存性:解離性再結合,解離性励起
- ▲ 回転状態依存性: 低エネルギーで重要 (<0.3 eV)</p>

振動回転遷移過程の必要性

理論計算の方法

配置間相互作用による解 離状態への遷移

非断熱相互作用による Rydberg状態への遷移

量子欠損理論



核間距離 R

配置間相互作用の正確な記述



散乱問題の非摂動解法

•Lippmann-Schwinger方程式の代数解法

Chebyshev求積法の応用

HD+ CI強 6x10⁻¹⁶ 度の影響 5 Reduced crosssection (eV cm²) 4 -回転励起に 3 -よる**Rydberg** 状態への再 2 結合



実験との比較 (H2, Zande et al) 前回の調査 v=0, N=0







図 2.5: HD⁺(v = 0)の解離性再結合 Yield(単色反応速度係数)。低い実 線(黒):本計算,ドット(赤,エラーバー付き):実験[15],実線(赤): 一次摂動計算[15],高い実線(黒):直接過程[15]。計算値は,回転エネル ギー 300K,ビーム軸方向熱揺らぎ 0.5meV,直角方向 0.02meV で畳み込 んである





膨大なデータ

解離性再結合 振動状態 0-6 (7) 回転状態 0-10 (11)

振動状態 0-16 (17)

組み合わせ:77の エネルギー依存断面積

振動遷移

組み合わせ:17C2=272 エネルギー依存断面積

電子データでの利用が不可欠

データ形式の統一の問題: tag word & num. data



















2電子励起 Rydberg状態

解離状態を含むです。 量子欠損理論 振動状態のように 解離状態を加える

寄与の大きな5つの Rydberg 系列を考慮



閉じた解離チャンネルCDC

エネルギー保存を満たさない解離状態と Rydberg状態の組み合わせ

漸近領域で閉じたチャンネルとなる (量子欠損理論)











Fig. 022 Dessociative excitation cross section of ${
m HD}^+$









•衝突エネルギー11 eV以上

•信頼性の向上

•H₃+

IAEAのCRPと共同歩調